

刻「養生七不可」杉田玄白著
翻「病家三不治」大槻玄沢述

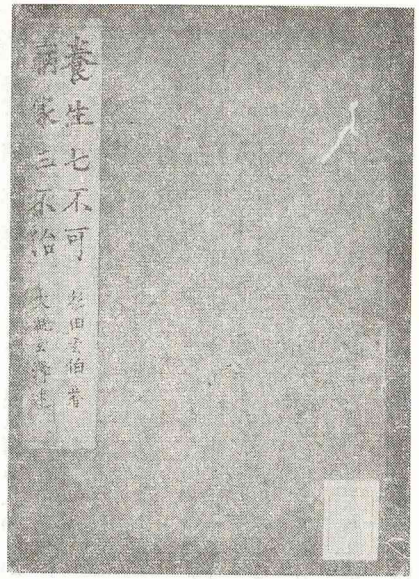
杉本つとむ
岡田袈裟男

解題・凡例

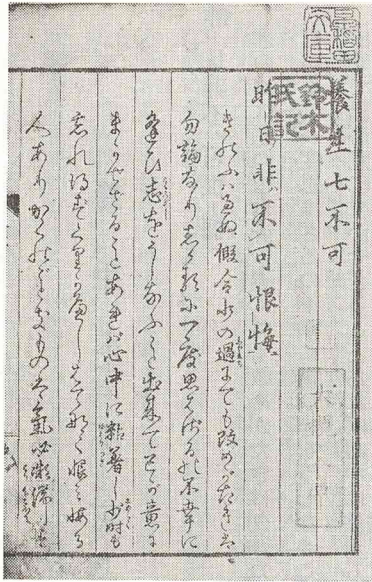
本稿は早稲田大学図書館所蔵の板本、『養生七不可』、同じく△附録Ⅴの「病家三不治」(函架番号 文庫8・A213)を翻刻したものである。同書はいわゆる半紙本で、縦三三・横二六、元題簽はなく、書き題簽で、△養生七不可 杉田玄伯著(△)病家三不治 大槻玄沢述Ⅴ(並記)とある。匡郭は縦五五、横四四、左右双辺・天地单辺。有界九行、一行約二十字。注文は双行。本文は漢字かなまじり文で、漢語には部分的に左ルビがある。内題はそれぞれ△養生七不可／附録Ⅴとあり、板心には、△七不／附録Ⅴとある。印題としては旧蔵者鈴木省三氏の△鈴木氏記Ⅴ・△文彦Ⅴ及び、△大槻文庫Ⅴ△早稲田文庫Ⅴまた識語のあとに△大槻文彦蔵・大槻茂雄蔵Ⅴがある。巻末に△仙台医鈴木省三君所贈／明治二十七年月 文彦記Ⅴと墨書がある。

『養生七不可』と『病家三不治』は、すでに日本衛生文庫第一輯(昭和二年刊)に所収されており、後者は『磐水存響坤』(大正元年刊)に所収の「醒世論言」中に、その上巻として見られる。今回の翻刻に参照させていただいた。翻刻にあたり次のような方針をとった。

- ① 句読点・清濁など、すべて原本どおりとしたが、漢字のみは原則として現行字体に改めた。
- ② 「」は改丁のしるし。丁数の表・裏はオ・ウで示した。

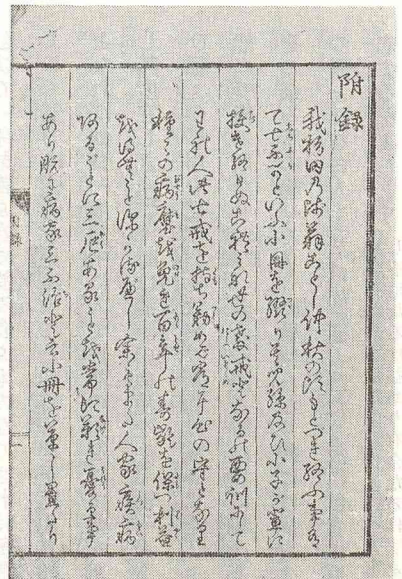


表紙

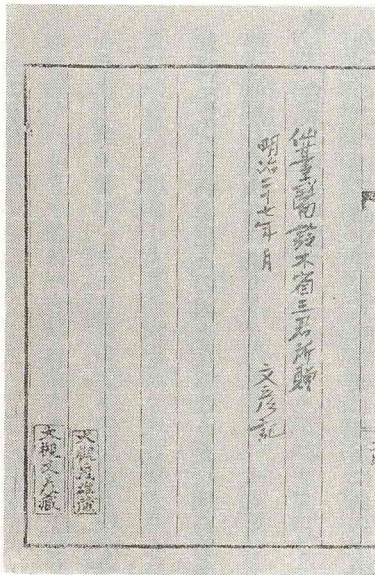


第一頁

「養生七不可」・「病家三不治」



附録第一頁



最終頁

養生七不可

昨日非不可恨悔^(ナラハ)

きのふは過ぬ假令少の過にても改めがたきは勿論なり
しかるに一度思はざるの不幸に逢ひ志をうしなふこと
出来て己が意にまかせざることあれば心中に粘着し少
時も忘れ得ずくりかへしはてなく恨み悔る人ありかく
のごときものは氣必疑滯す^(初オ)是蒙昧より天寿を
損の一つとなるなり

明日是不可慮念^フ

明日はしられず大凡成と成らざるは賢愚によらず予め
知るゝ物なり然るに成ることをなし得ず成らざること
を強てなさんとはかり無益に思ひを勞し心中少時も安
からず徒に快鬱して日々に快事をしらざる人あり是ま
た蒙昧より天寿を損るの一つなり此二事を明らめ得ざ

れば^(初ウ)百病を生るの因となるなり是を明らむる大
要は他なし唯決断にあり

飲与食不可過度^ス

飲食の二つは其品を賞し其味を楽しむにあらざる唯是
を以て一身を養ふ為に飲み食ふものなりされば饑飽に
よりて氣力に強弱を見はすこと其著しき正拗なり如何
となれば飲食一度腹中に入て自然の力を以て是を消化
し其度宜しき^(二オ)時は清潔の血液を生じ能一身を養
ひ種々の妙用を便ず旧物は棄り新物は養ふこと人々自
然に受得る所なり^{其理後}若度に過る時は養に剰余あり
その余る所の物ぜんく^にに穢物となり終には病を生る
の因となる古人も守^レ瓶と箴たり故に飲食は度^に
応するをよしとす^{もと}其度に有余不足なきを貴といへとも少
し不足なるは益あり有余なるは害あり

非^レ正物不^レ可^ニ苟食^ニ（三ウ）

食は五味の調和を賞すといへども食に対して品数多く交へ食ふべからず、碗中にては其品別なりといへども胃中に下るときは混して一となり消化して不潔の血液を生ず譬へば五色の間して何の色とも名くべからざるが如し殊に饔飩せる物魚鳥の肉不鮮の物最食ふべからず是また化して不潔の血液となる共に病を生るの因となる唯新鮮にして品数少く食ふをよしとす（三オ）

無^レ事時不^レ可^ニ服^ニ藥^ヲ

藥物は効力ある物ゆゑ法にたがふ時は却て害あるものなりされば古には毒ともいへり然るに今時の人は是をしらず藥だに服すれば能き事とこゝろえさせることなきに漫に藥を服するは甚しき誤なり医せざれば中医を得と云ふこともあり大抵の病は藥を服さずとも自然の力によりて病は平癒するものなり辺鄙の人は大方の病には藥を服さずして（三ウ）快復するもの多し譬は飲酒度に過たる人は発渴頭痛し心中も懊懣す故に自ら吐せん

「養生七不可」・「病家三不治」

ことを欲す終に自ら吐逆し其飲たるものを吐尽す如許なれば忽快復す是其自然のちからを以て治るの証なり然に其人力足らず吐むと欲して自ら吐事を得ず如許時は吐藥を与へて是を吐しむこれにより吐ときは其治すること自然の吐逆と同じ是藥の効にして藥を服する（四オ）の法なり総て病の治するは自然にして藥は其力の足らざる所を助るものなり西洋の人は自然は体中の一大良医にして藥は其輔佐なりとも説りかくあることを弁へず少の事にも藥を服するは其益少くして其害多し殊に持藥は意あるべきことなり仮初にも腹中に入たる物は再び取去りがたきは勿論なり瑣細の物にても知べし鼠蝮蛇の類ひ人を（四ウ）損傷すといふは微細なる齒を以て人の肉を咬み蝕なりしかある時は其毒氣血に従ひて流行し散蔓し大毒となり動すれば命を失ふに至る藥も亦然り譬ひ一丸一刀圭にても効力ある藥を輕卒には服すべからず恐るべきは此物なり其法に合はざるときは害あるがゆゑなり

頼ニ壮一実ニ不可過房

人の精水は生涯其量の定りたるものには「(五才) あらず
一気の感動によつて血液中の精気を分利し一種の靈液
となして射し出せるなり故に生靈たる人物をも生ずか
くあるものを漫に房に入精水を費す時は一身の精気を
減耗し生命を損する事言葉を待ずして知るべし
勤ニ動作ニ不可好安

血液は飲食化して成り一身を周流し昼夜に止らざる事
河水の止らざるが「(五才) 如し此内より阿蘭陀にてセイ
ニューホクトと名づくる物を製し出す漢人の氣と名づ
くるもの是なり 余が解体新書に訳する神經汁亦是なり漢説
は形なきに似蘭説は形あるに似たり其説と
こる異といへども校訂すれば一理なり物理小 血液は此力を
識に説くところ略蘭説に近し合せ見るべし 血液は此力を
以て順り氣は血液の潤を以て立こと一つなるが如し 器漆
に呵すれば露立葉子を握れば又露立 此二物の妙用によつて
は共に其証なり後注と見合すべし 生涯を保つ事衆人異事なし然れども日々に生し日々に
増のみにては害ある事故天より主る物を具へ内には臟
腑在て是を「(六才) 分利し其色を変化し外には九竅をま

こゝのつゝあな

うけて其物を泄す上より出るものは痰唾涕涙の類下
り出る物は小便其糟粕は大便となして棄去り其精の氣
となる物は鼻により天の太氣を吸入し呼に從て此物を
兼て鼻口より泄す其他は一身腠理より霧の如くに泄れ
去る 腠理は即汗孔なり是より泄れ出るものを西洋にてヲイ
トワッセミングと名づく常は容易に見えがたき物なり
冬時陰氣行れ鼻口の氣見え易き頃日に映する時は遊糸の
如く影さすものはなり皮膚に潤あるは此物を以てなり 如
許日ミ程よく泄れ去る人は病あることなし是血液「(六

才) 清潔にして能順行し氣も閉塞せざるか故なりかくあ
る人にてても動作を惡み安逸を好む時は血液の清きもの
も次第に不潔となり氣も是によつて閉塞し 動作せざれ
あしくなるの証は仮如は久坐久臥すれば其床に着たる下の方
已が体の重きに圧れて氣血の流行自由ならず故に其所麻痺す
然れどもこれにも遅速あり樂事には遅く患事には速し是氣の
閉と不閉との分れなり長病人の破胸を生ずるは其甚にして血
液の腐敗 雨病を生ずる因となるなり 雨水は茶を煮るに良
するなり なるものなり是を貯
ふる法は雨の下る時壺にうけて是を貯へ口を封し坐右に置昼
夜其傍を往來する時其壺を振動かせは壺の水數日をへて損ぜ
ず清潔なること新に下るものゝ如し若振動かさざれば腐て濁
を生じ終には垢を生し虫も生ず人の動作を惡み血液不潔とな
ること此理 「(七才)

にちかし

夫人の生れながらにして強弱あるは草木の同じ時節に種をくだし同じやうに培ひ同じ畠に生じて肥瘦あるが如し能生長すると能生長せざるは其種によるなるべし然れどもそれ相應に花咲実のり秋に至りて枯る所は同じことなり是其物の天年の終れるなり若風雨に逢て吹倒され或は人の為に傷られ時ならずして枯ることあるは其天年を終らざるなり人亦然り先天の毒あると毒なきと「セウ」によりて強弱あるなり毒ある物は生れながら弱く病あるものなり 此毒より病ものは治しがたし 如許者も保養能ときは受得し天寿は保つものなりまた生れながら強く無病なる者も後天の毒とて保養あしければ病を生じ 此毒より病者は保養を能し薬を用れば治するものなり 天年を保ち得ず半途にて死者なり是草木の風雨に逢て時ならずして枯るに同じ愚老生れ得たる病身にて万事人なみならずされど幸に医家に生れ少しは養生の道をも「ウチノイヘ 弁へ幼より強たる事をなさず其益によりてや此年月を無事に経て孫子も生し今日にては人に健なりと羨るゝほどなり然れども生れ得し病身の治したるにはあらず元

「養生七不可」・「病家三不治」

より我身のことなり且医者のことなれば脉をも診ひ腹をも探りて見るに此所宜くなりしと思ふ所もなしはや来る春は古稀の年に成事なれば其しるしには目齒の少しあしきまでなり其外は不自由の所も覚えず健なりと誉らるゝも虚譽にはあるまじ「ハウ」愚老より年若き朋友どもの丈夫頼に身を持たせし者は皆千古の人となり今は此世に在者は少し前に譬へし草木の生長はあしけれど同じやうに花咲実のり枯る時節までは持つべきといへるは愚老が類ひなるべきか総て血液の不潔なるもの次第よくもれ去さる時は其余れるもの便よき所に留滞し積りくくて苛烈の悪液に変し其極に至りては楊梅結毒などの多年癒ざる瘡口より流れ「九オ」出る悪水の如く臭気は鼻をつき味は辛烈にして胆礬の性にひとし故に筋肉を腐蝕し堅硬なる骨を朽腐す是によつて鼻柱も落頭骨も砕く梅毒のみならず他の病もまた然あるなりかく恐怖すべき悪液を貯へながらも多年生命を保つものは幸に其液一所に聚り凝がゆゑなり若悪液周身に散蔓するか又は生命を主る要所を侵し

傷る時は忽に死するものなり其惡液の一所に聚り瘡とな
る「九」ものは前に譬へし草木の幹ばかり半朽て枝葉に
枯ざる所有が如し是其根へ腐のいらざればなり又氣の変
により閉塞して病をなすといふは病皮の裏にあることな
れば容易に説示しがたし仮令は少しく心下の痞と腹の微
満する類は多くは氣の閉塞するによるなり故に暖氣すれ
ばもれ屁屁すればもるこの滯氣の泄れ去により緩りて快
を覚ゆるなり又其他留飲に似たる症にもあり是も「十」
腸中に氣の聚る所ありて其聚る所胞脹し他の所を推し迫
む故に拘急する所もあるものなり是等によつて腸の位置
或は片位し或は上下し少しく其本位にたがふ
たるやうに順能ものにはあらず上下左右種々に
迂廻曲折したるものなり大体魚鳥の腹に似たり 故に能く按腹
すれば其本位に復しその氣の聚るもの散ず此時は雷鳴し
或は水の如くに鳴りて治す又鍼して治するも同じ其鍼眼
より微の氣もれて絞腸の本位に復する故なり總て氣の閉
塞も甚しき物は生命を損ずる事惡液の「十」害をなすに

異事なし 凡氣といふものは雨を帶たる風の如し其力弱き時は
害少しその暴烈なるに至りては強力にして家を倒し
垣をも倒す又童子の持遊びに紙銀炮と云ふ物あり是は細き竹の
後先の節を去り其筒になりたる内へ半より少し先のかたへ嚙た
る紙を丸に作り細き棒にて推送り又別に一丸を作りて同じやう
に推やる時は其間に包れたる空氣次第におし迫められ勢ひ強く
なり終には先の丸を激発す其音恰も二三分の銀炮
の如し氣の閉塞して勢ひを増こと大凡是に似たり 蓋風寒暑湿
の類ひ婦人女子富家に生れし者は室居の手当衣服の備へ
如何にも防ぐべき道あるへし男子は野外をも往来せざれ
ば立がたき身なれば貴人といふとも天より行るゝの氣な
れば防ぐべき道なきことなり愚老年來外邪に傷られ「十
一」し人を見るに血液清潔のものは多く輕症にして治し
易し元より不潔の血液を貯へし人は邪氣是に相混じて重
症となる所謂邪氣乗虚入といふは此類ひなるべし如許
の所を知て常に血液の不潔とならざるやうに意を用ゆべ
きこと也大凡大病を患る人快復の後には多く病前に比すれ
ば形体壯にして無病なりと云ふものなり是は如何なる人
にても大病中は飲食をつゝしみ保養を宗とする故なりそ
の「十二」元より積貯へし不潔の血液病中にもるべき所

より泄尽新に生ずる清潔の血液の能養ふが故なり是等を以て血液の成立を明むべし又たま／＼右説く所の旨に違ひ長命せし人もあり中島官兵衛隠居して後寛亭といへりといへる人は日々大酒せしが八十五歳にて死せり西依儀兵衛成斎先生といへりと云ふ儒生は美食にして美味を嗜し人なりしが九十八歳にて命終れり三井長意といへる医生は七十四歳にて男子を生じ其子十九才の「十二才」時家を譲り四年隠居して死せり此長意は直に逢し人にはあらず其家を残し子を宇右衛門といへり此宇右衛門には親しかりしゆゑ其平生を聞き其宇右衛門も七十四歳斗にて男子出生有し悦友太夫隠居して徳壽齋といへりといふ人ありき生得才氣もありしが如何なる不幸にや其身至て貧しく官途の間にも思はざる事出来て家禄をも甚しく減ぜられ夫のみならず其子どもの事によりて隠居して後罪かうふりしことありたり他の目よりもかくては命続くまじなど憐しほどなりしが八十五歳にて死せり本橋岡右衛門といへるははか／＼しき身にも「十二才」あらずしかも微録しやうろくの者にて漸々夫婦のみくらし子といふものもなく楽しきことも見えざりしが滞りなく六七十年の勤仕を経九十の

「養生七不可」・「病家三不治」

年士分に加へられ九十九歳にてちかき比死せりかくさま／＼に替りたる人々も皆長命はなしたり何れも同藩の士おなじやしきにて朝暮出会其平生は知り尽せり悉く心まめにして動作を嫌はず事に臨て決断よく成と不成を能弁へしものどもなり然れば稟受さへ強き人ならば少し飲食は度に過ても動作を能し決断むまれつきよければ「十三才」氣も滞らず血液も不潔にならず長命はなるものとみえたり是を以て見る時は此二事生を養ふ所の第一なること明らかなり他所にても長寿の者を見しに多くは此類なりされども其平生を委くしられは証にはなしがたし故に此には率ず若生得虚弱の者此所を弁へず彼は大酒せしかど何ヶ年の寿を保ち是は過食せしかども多病にはなかりしと己が生得を弁へず謾りに飲食を過し且これに加ゆるに無益の事に「十三才」思を勞する人々は如何にして天寿を終ることを得む是鄙き譬にいへる鶉の真似する鶉の類ひなるべし又人間一生は飲食の為に身を持つとて明日病ことを思へもせず過飲過食する輩は五十年の苦勞せんより一日の榮花勝れりと眼

前刑にあふは知りながら盜するもの共と品こそかはれ其情は相似たるべしかゝる人あらむには逆も此事語るべきことにはあらず」(十四オ)

今年享和改元八月五日余有卦といふものに入よしなり男女の孫子ども不文字つきたるもの七つを以て余を祝す也余また若年より意に注し事と漢土阿蘭陀諸名家の医書中より養生の要たるべき一二を取り舐犢の愛余り彼等が命長かれと其うけに入ものゝ為に不文字七つを以て此七事を作り同じく祝し報ゆる也是は医家た

附録

我杉田の師翁ことし仲秋の頃もとづき給ふ事有て七不しもふかといふ小冊を綴り其児孫及び小子が輩に授け給ひぬこれみな世の教戒となるの要訓にしてわれ人此七戒を

る人は能知れる」(十四ウ) 所なれと其業にあらざる者はしらざるところもあるべしと記し出したり其内象の主用と病患伝變の理とは知りて益なければ皆此に条ず唯知り易く解し易からむことを要とし俗談を以て述著せり総て事のくだくしきは所謂老婆の親切なり又一々写し与へむは採筆に懶し將能ついでなれば親友の子弟にも頒んと志せどもそれは猶更に」(十五終オ) 心苦し因て梓に刻し家に藏して其贈らむと思ふ人との数に乞らしむるまでなり

小詩僊堂主翁著」(十五終ウ)

持ち勤めば常なほに心の守となり種々の病魔びやうまを免れ百年の寿齡を保つ利益を得むこと深かるべし余もまた人家疾しつ病あるごとに三厄あることを常に歎き憂る事あり既に

病家三不治と云小冊を草し置たり「一」世を憂るの心においては聊か師の七戒の深情に似たること有りよりて其厚意に繼共に是を同志に伝へむ事を冀ふ師翁速に許し給ふに従ひ頓て其旧稿より大略を抄出して其後に附すは師翁の忠誠に与し彼救ひ我助る同胞の人の恩徳に報施せむとするの微衷なり才短く位賤しき身として斯るくた／＼しき痴言を述世の笑を取るをも省ざるは我医門の古き文には病危ふして後棄して功驗を得るに至れるの「二」術にあらずたゞ初より病しめざるやうに教ること誠の良医なるべけれと見えれば拙き筆におそれ恐るゝ所なれども我常々見聞しことどもを書つゞれるまでなり見る人取捨してこれを扱ばゝ一つの助けともなりなむかといふ其年の初冬徒弟大槻茂質謹で記す

賤者病不_レ尽_レ治

貧賤は人の惡む所といへとも人々天より受得たる所なれば逃れても逃れざる所なりされば貧賤に「三」生れし人

「養生七不可」・「病家三不治」

は朝夕の飲食四時の衣服も其程々に合ふことを得ずまして居宅の狹隘猥雜なるは尤憐むべしそれが中に病る事あれば行届ざる事のみありて全く其天年を終る事を得ざる者多し然れども輕賤なる者は自然の稟受強実にして常に身体の勞動よき故にや少の病なれば其自然の力にておのづから癒る事もあり是賤しき身に備りし天幸ともいふべき也かくはあれど其人々に生れ得し強弱と受たる病の浅深あれば尽く此には例し「二」難し先其第一は医者らしき医者之藥を心のまゝに服する事を得ず殊にまた幼きより何事も聞たる事も学びたる事もなければ天より稟得しまゝに生長し万のことを輕忽にのみ心得命にもかゝるべき病に臨みても等閑事のやうに思ひそこあたりの売藥妙藥を買ひ求め其功能をもよく糺さずみたりに是を用ひ効なければ忽に惑ひ易く漫りに彼是を服し又其間には同情の人々寄集り此病には何を食すれば治し彼病には何を飲すればよろしと得も知れぬもの「三」はかり飲み食ひ殊に貧き者は多くは賤く賤しきものは多くは愚なる故彼

同類なる人のいふことをば深く信じ心ある人と医者 of 云事は却て等閑に聞なして信ぜざるものなり是教論の道さへ意のことくならざる所なり又少しも病氣の模様うとしければ神ミ仏ケの崇となし或は物の怪のなすわざなりと籤を伺ひ卜に問ひ巫を信して薬をおろそかにし治療の度を失ひ輕きは重きに至り重きは生命を失ふに到るかくのとき貧家の病者は卑賤愚陋なればとて分別「三ウ」有人の教論に従ひ能此等の所を弁へて命は大切な物と心得かならず誠ある医者に託すべし諸病ともに等閑にして重きに至れば生命にも係ることなれば仮初に取扱ふ事なかれ

豪家病不_レ順_レ治

家富豊なる人は金銀利倍の事にはさしく他事には多くはうときものなりこれ農工商のみにあらず士君子の間にある人にも間々有ものなりすべて富有のものは勢はありながら慮浅く惑ひは却て深き「四オ」もの多し是等の類ひ幼きより何事も意のまゝに為来りしかもする事なす事廻

りよく少しも勞苦といふ事を知らざる身に若も病受ることある時は平生のことゝ同じ様に心得其病の浅深も弁へず卒に平癒なるものと思ひ頻りに治を急ぎ衆医を招きて治療を乞ひあしたゆふべに薬を転じさせることなきに人參犀角等を用ひ貴重薬は如何様の症にても効あるものと心得勢ひに任せて服用しそれも欲ふかく用るに度を過し此あや「四ウ」まちにより知れたる症も朝夕に進退する故其節度を失ひ其治を誤る者少からず是全く彼を信ずるかとするは是を信じ初を疑ひ後に惑ふによる総て富豪の家の悉く愚なるへきにはあらねとも其家へ出入する眷屬あまたある物故それらの類寄り集り一坐のあいそくに阿り諂ひを第一とし何の弁へもなく色々のことをいひつり下地の素人を迷はすること多し殊に飲食の手当は其家にて届き過る程なるに又所々より病氣見舞と唱へおくり「五オ」来る物多く心に好ぬものまでも進め与へ自らも貪り食ひそれが為に苦しみを加ふる者もありこれらの類ひ彼も益なく是も益なく終に輕症重症となすに到るかゝ

る時に及むては家人も亦同じ様に疑惑し其決を巫祝売卜に託し生命を失ふ者挙て斗へがたしこれ勢ひあるの妨にして疑惑より誤りを生ずる所なり宜く心を用ゆへき事にあらすや又都家富豪の人には間々書物数寄とて生物識の輩も有り中には方書の片端をも読若その「五ウ」人の家に病人ある時は治を託する医者云事をも信ぜずひそかに私意を加へて病の手伝なす事あり所謂書を以て馬を御するの類これ無益の第一にして却て害を招くの階なり幼より学ひ老に至りても熟せざるは医者業なり千態万状の病変毎事に手がけ心目に慣習し自ら数人を療治せされば其機会は得かたき物なり中々片手業になることゝ心得害を招くは不学の人より却て大なる愚といふへき也斯る家の病者は「六オ」軽きも必ず重きに至る物也諸症ともに漫りに薬を投ずることは仮初事にあらざり医の業は生命に係る所なれば自ら求めてかならず其大事を誤ることなかるへし富有の家いよゝ深く心を用ひ思慮ある人に信実にこれを謀りて医治を決しみだりなる雑説を執用ひず私意

「養生七不可」・「病家三不治」

をは猶更に加ふる事なく常を慎み変を守り功者の一医家に委任し其程く病患はやく回復に至るやうになすへき事なり富家は万つ事足る身なれば「六ウ」此所に心さへつきなばなしよきことなるべし

尊貴病不決レ治

貴人は天の寵靈によりて生れ給ふ御身なれば羨むへきの第一なり然れとも死生は天にある事なれば貴人といへども逃れ給はざるはこの道なり其病あるに至りては却て不幸にして非命の死を得給ふ事もあること也是尊貴におはしまして止事を得ざる処あり如何となれば先胎内より其養ひ天授自然にたかひ給ふこと多し事あり「七オ」ても其日のいとなみにいとまなく常に何の思慮もなく身のおもさをも忘れたち居も常とかはらず其功により氣血のめぐり宜く産することともいと易し是自然の道にかなへばなり貴婦人は是と背きて着帯よりは色々の仕つけしならしありて常とかはれること多し既に出生し給ひて後も亦然り添乳抱寝等の事なく産母の乳汁は参らせず乳母のちゝはかりを用ひそれも御扣母といふものを抱へおき折々に参らせ是等も彼しならし有て食事居動も自由ならずこれにより其乳ながく保たず不日

にあがりやすくかくあれば引かへく参らすにより乳汁も程よき養とならず又少しにても啼声を発し給ふ事を忌ミ唯昼夜に抱かへ機嫌よきを宜き事「セウ」となし参らすは何事ぞや其這習ひ立習ひ給ふことも平人よりは遅し是既にその本づく所ありて止事を得ざるの所よりなかくあるゆゑに其生長し給ひて後も藥作りて地に植付ぬやうなる養ひ故薄弱にして強実になしまさるはことわりなり是等皆幼より育まゐらす御乳やめのとのるい其分附添奉る人との常にあつまりて何の弁もなく無益に大事くを主張せしの弊なり多は丈夫をも婦女をも同じ様に育まゐらすがちなり又大人となり給ひては臣下あまた召仕ひ給ふ身なれば何一つ備はらざる事なし自在にのみ成り立せ給ふにより起居「ハオ」衣食はいふに及はす臣僕妻妾手足の勞を助け参らすにより自然と身の労働も少く心の苦勞は露ばかりも知給はす万事足り給ふ事故却て種々の病因を醸し給ふ事おほし又其者少の差別なく病あらせ給ふに至りては常に持藥といふものを参らせおき腹内に藥氣馴給ふにより事あるに臨むでも其藥効賤人より

は薄きやうなり稍重症に至り給ふ時は猶更にして例の大事くを主張し其藥の転すへき時節にも転せすいたつらに衆医を集めて「ハウ」衆説を聞彼をも是をも危み懼れ無益の事に時を移し緩急の度を失ひ給ふこと少からず漸く其評議定まり其治を託し給ふに至りても其医者衆医の聞を憚り十分に此藥的当と思へども古人の論説に正しく合ざれば大事大切に惑ひ意を決して調進せず況や出所のなき藥は畏縮して猶以て進めまゐらせず或は折角任せし他医ありても其藥をも手医師の内評定まちくにて速に参らす事おくれ所謂小田原評定のみにて事を尽「九オ」さすつまる所は重症となり給ひ終に身まかり給ふ事多しこれを要するにすへて貴人の病は己を尽して残すことなしといふは稀にして無益の鄭重に過毎時かの己をつくさず残す事あるよりなす方なり将相豈異種あらんや生れて声を同し長して俗を異にするまでなり徳行をこそ教へ参らすべけれ其身体を養ひ参らすには常人に別なる事はあるべからすこれ前にいふ彼仕ならしより其かたくの必ず

数寄好み給はざるの所も無抛な「九ウ」し給ふ事あるべけれども是みな自然に逆ふの事なればとめて此所に心を用ひ其本トを思慮し給はゞ此弊は改るべし妊娠中より生れ給ふの後疾病に罹り給ふに至るまでも無益の鄭重に過給はざるやうにありたき御事なり

右三条は初にいへる既に予が撰へる三不治の抄出にて本編には其詳細を録示せりこゝには其概略を挙その大要を約すれば貧賤の病は輕忽なるに時宜を怠り富家の病は疑惑に「十オ」よりて治を誤り貴人の病は鄭重に過るに失す此三つの家々常にこれを弁へ此心を斟酌しなば必ず天横の死は免るべし凡病家は素人ゆゑ病の筋を知らざるはもとよりなり然れ共受得し病の浅きと深きは自らしらるへし又衣服居所の手当も分限相應に寒温宜に適ふやうにすへし食物は淡くして輕き物はよろしく甘美して重きものは害ありてあしといふはこれ又勿論の事なりされど淡きものにも毒「十ウ」あり重き物にも害なき物もあり万の事すべて皆其任する医に丁

「養生七不可」・「病家三不治」

寧に問尋ねその指揮する所を守り私を加へざるを専らとすべしこれ医を知らざる病家の一大要法なり」(十二終)

(墨書)

仙台医鈴木省三君所贈

明治二十七年月 文彦記」(十二終ウ)

解 説

はじめに『養生七不可』ならびに、『病家三不治』は、すでに翻刻され活字になっている（解題参照）。しかし必ずしも原本を正しく読んでいるとはかぎらない。まして内容にいたってはほとんど吟味されていないといつてもよからう。早稲田大学図書館の洋学文庫がほぼ整理された段階で、親しく二作品を披閲する機を得たので、ここに若干の解説を付して、翻刻し、研究者に資料提供をしたいと念じる。わかりやすく、二つに分け、まず『養生七不可』（以下『七不可』と略称する）から解説していこう。

『養生七不可』のこと 本書の成立であるが、末尾の文中にみえる「今年享和改元八月五日余有卦といふものに入しよしなり」（一四ウ）とあること、また本文中に、「来る春は古稀の年に成事なれば」（八ウ）と記している点から、享和元年（一八一〇）に成立、玄白が六十九歳の時のものである。この年に、国学の大家、本居宣長が死没している。さらに最後にしている「小詩僊堂主翁著」の小詩僊堂は寛政十一年（一七九七）七月廿八日に柱立を行なった玄白の書齋名（『蕩斎日録』によると「小詩仙堂」と仙の字を用いる）であるから、これ以後ということもネガティブな意味で確実である。成立はきわめて明確なものといえることができる。さらに『七不可』執筆の動機についても、末尾の文中に明確に示されている。

（前略）男女の孫子ども不文字つきたるもの七つを以て余を祝すと也（中略）紙牘の愛余り彼等が命長かれと其うけに入ものゝ為に不文字七つを以て此七事を作り同じく祝し報ゆる也（中略）一々写し与へむは採筆に懶し將能ついでなれば親友の子弟にも頒んと志せどもそれは猶更に心苦し因て梓に刻し家に蔵して其贈らむと思ふ人々の教に乞らしむるまてなり

右のように古稀になる玄白を祝う孫子のために本書の執筆を志し、親友など知人へ頒布の意もあつて上梓したというわけであ

る。いわば一種の私家版であり、同時に長年の医師としての経験の粹を書きつづったものでもある。

次に内容に関してであるが、同じく、八余また若年より意に注し事と漢土阿蘭陀諸名家の医書中より養生の要たるべき一二を取り……Vと記していて、大方の推測がつくであろう。玄白の経験、漢土・オランダの医書と三つの源から本書の内容ができていて、と考えることができる。さてしかしそれらが具体的にどのようなものであるかは問題である。もともと『七不可』は、学術書ではない。八愚老より年若き朋友どもの丈夫頼に身を持たせし者は皆千古の人となり今は此世に在者は……Vというように、玄白の別著『蘭学事始』の一部を思わせるような書きぶりである。したがってその根拠となった資料文献を具体的にあげるのはいささか困難なことかと思う。しかしたとえば次のような場合は、どうやらヒボクラテス及び、それを信奉する後世の学者、L・ヘイステル (L. Heister, 1683-1758)、H・ブールハーベ (H. Boerhave, 1668-1738) や C・W・フーランド (Ch. W. Hufeland, 1762-1836) のものと関連があると思われる。

玄白が早くから接した蘭書では、かの有名な『解体新書』(安永五年、三訂刊)の原書(いわゆるクルムスのターヘル・アナトミア)があるが、この書の脚注にヒボクラテスの略伝があるので、それなどからヒボクラテスを知ったであろう。これは早稲田大学図書館蔵の八桂川甫賢筆 ヒボクラテス画像并賛Vに見えるし、蘭学者の間でもかなりひろく知られていたと思われる。もう一つは、ヘイステルの内科書によるといいうものである。これについては、大槻玄沢が書きしるしているものがある(後述)。しかし玄沢とヘイステルの内科書との結びつきは、まだ究明すべき点があって、彼が、その内科書によって、ヒボクラテスの医学思想を知った最初の人とするのには疑問がある。⁽¹⁾ そのうえ、『磐水存響』⁽²⁾にのる八磐水漫草(三三) Vの文は、八和蘭医狄古登云。協速貼盧内科書第五章。載今攬拉貼斯語曰……Vとあって、上述の脚注からであることもわかる。さらに玄白が蘭書翻訳上で師とも仰ぎ、いろいろ指導をうけた吉雄耕牛(寛政十二年没、七七歳)が、常にヘイステルの書を座右においていたらしいことが、彼の肖像画からも推定できるので、外科書のみで、内科書は読んでいなかったという明確な資料のないかぎり、両方を読んでいたと考える方が、妥当でしょう——おそらく玄白も耕牛から、ヘイステルのものにみえるヒボクラテスの医学思想をきいたと推測する方が、自然である

う。(なおついでをもつて蛇足を加えるなら、玄沢の翻訳はその成立と刊行にかなり時間があり、それが原稿の推敲ではなくて、別の資料なり、情報、耳学間によると思われるふしがある。そこで玄沢の訳書は、刊年をもつて成立ぐらゐに考えた方がよさそうである。これは後日に詳述したい。)とすると、ヒポクラテスを知ったのは、ことに医学思想の点をふくめて、玄沢よりはるかに玄白の方がはよいと思われる。玄白が『解体新書』以前に、『瘍科大成』で、ヘイステル(外科書)のさし絵をとっており、それは安永九年庚子(一七八〇)以前であることも確かと思われる。耕牛はさらにこれより先と考えられるのである。

ヘイステル Lorenz Heister (一六三二—一七〇七)は、解剖の術において著名であり、一七〇七年にブルーハーベの講筵に列しているから、両方の点から、蘭学者に注目されたい。ヒポクラテスおよびそのヒポクラテスを尊敬したブルーハーベの医学思想を、結果的に蘭学者に伝達する役目を果たしたのである。古河市の河口信広氏所蔵の玄白八十五歳の折の筆ハ医事不如自然Vなども、玄白がヒポクラテスの思想を彼なりに、かなり自分のものとしていたらしいことが推測されるのである。そしてまたヘイステルと関連ふかく、むしろヘイステルの師であるブルーハーベの医学思想が玄白に読みとれるのである。すなわち、ブルーハーベのことはハ自然についての無知と誤謬とは自然の原則についての軽はずみな仮設から始まるVは、そのまま玄白のハ医事ハ自然ニ如ズVであらう。またハ真理の単純さが偉大であるVなどもそうである。ブルーハーベが一七七五年に講演したハ医学における真理(確実性)を得ることについてVにおいても、ハ医学は自然学のすべての真理を基礎におくべきであるVなどと述べている(ブルーハーベの伝および医学思想は阿知波五郎氏の諸論考に多くを負った)。こうしてブルーハーベと玄白の医学思想の一端がよく『養生七不可』にうかがえるのである。

ヒポクラテスの名は、吉雄如淵の『属文錦囊』中の蘭文と訳文にもみえるように、あるいはまた武部尚二の雑記帳にもみえるように、長崎通詞にはかなり知られていたと思われる。玄白にあって淵源はやはり、長崎通詞、具体的には吉雄耕牛あたりから得たものではなからうか(玄沢にあっては、同様であらう³⁾)。玄沢がハ磐水漫草Vに記述するヒポクラテスの漢字表記も注意してよい。ハ載今撥拉跼斯Vは、他の(江戸の)ハ依卜加得(斯)Vなどと著しいちがひがある(この表記は中国の地理書に見える)。私見で

はおそらく原書の発音とその表示に忠実な長崎系の表記が、玄沢のものではないかと思う。とすると玄沢はやはり耕牛からきいたという可能性は大きい。さらに後考をまらしたい。

吉雄耕牛の吉雄塾では、その教授項目に、ハ紅毛文字／紅毛方言／西洋医言 ヱ などがあるから、おそらくハ西洋医言 ヱ の中には、西洋の医聖であるヒポクラテスをのぞくことはなかったと断定してもよからう。日本でヒポクラテスを蘭書をとおして知った最初の人は吉雄耕牛であり、十八世紀半には、すなわちヘイステルの死去のころには、すでに長崎通詞などにはよく知られていたと考えてもよいのではなからうか。

ヘイステル以外ではフーヘランドとも至近の距離にある。ただし、フーヘランドのものはやや後に移入されたと思われるから、単に思想の上で類似一致するということで、影響という点では、ともにブルーハーベからと考える方が妥当しようか。ただ次の玄白のことばとフーヘランドのことばとを比較されたい。

総て病の治するは自然にして薬は其力の足らざる所を助るものなり西洋の人は自然は体中の一大良医にして薬は其補佐なり

とも説り（四ウ）

右の言はフーヘランドのことばの一部に、ハ凡ソ疾病ノ治スルハ、自然良能ノ營為ニシテ、医術ハ唯々之レガ輔相タリ ヱ（青木浩斎訳『察病亀鑑』）とあるのに類似する。薬と医術との相違はあるが。あるいは、また次のことばはどうであらう。

飲酒度に過たる人は発渴頭痛し心中も懊憹す故に自ら吐せんことを欲す終に自吐逆し其飲たるものを吐尽す如許なれば忽快復す是其自然のちからを以て治るの証なり（四オ）

右は杉田成卿が『済生三方下』のハ吐葉 ヱ の項に依卜加得のことばハシ・クキド・モヘンヂユム・エスト・モーヘ ヱ を引用して、ハ訳シテコレヲ言ハバ、良能若シ有害ノ物ヲ泄サムガ為ニ吐ヲ欲シ吐ヲ催シ或ハ已ニ吐ヲ起ストキハ即是吐葉ノ主治ニシテコレヲ催進スルハ医ノ要務ナリ ヱ と訳述しているのに類似する。いわゆるハ自然良能 ヱ の説がここに見事に説かれているということができよう。あるいはまた、ヒポクラテスが、ハ医師の心得 ヱ 中に述べているハ人間の保持された健康状態は本来運動を具えた自

「養生七不可」・「病家三不治」

然であり、この運動は外から来たものでなくて呼吸、体温により、体液の作用により、しっかりと調節され、あらゆる仕方、あらゆる滋養、あらゆるものによって組み立てられたものV（『古い医術について 他八篇』小川政恭訳）などともかようなもののが⁽⁴⁾あろう。

しかし玄白がハ養生の大意Vと記している点を考慮すると、直接的にはフーヘランドの“Makrobiotik”（玄刊）でもみていたであろうか。しかしこれは時間的にいささか早すぎる。同書の刊行から十年もたたないうちに、玄白が読んでいるとなると、当時としてはどうも信じにくいではあるまいか。ドイツ語をオランダ語に訳し、それをさらに誰かが日本語に訳して玄白に伝えたことになるので、どんなものであろう。参府の長崎通詞、あるいは山村才助あたりが訳したか。あるいは原本を要約した形で、通詞を介して参府の蘭人からきいたのかもしれない。またはフーヘランド以外の医師のもので、共通した医学思想をもった医師のものが考えられるかもしれない。日本における西洋医学思想の受容という点からも興味がある。こうして『七不可』はかなり早い時期の注目すべき一材料たることを失わぬであらう。

漢説ともいべきものは、玄沢のものと一緒にそこで解説するが、中国書の『物理小識』が引用されているのも注意しておいてよからう。同書は当時および幕末まで、蘭学者がたえず参考にしたもので、その影響は測りしれない。このほか、血液と病いのとの関連。風寒暑湿のこと。梅毒のこと。『解体新書』のこと。七十四歳で男子を生ませた者。ハ消化・保養・官途・空気Vなどの用語など、ハ俗談を以て述著せりVとする玄白の態度がよくうかがえる。

なおそれぞれの項目ともいべきものは、たとえばはじめのハ昨日ノ非不^レ可^二恨悔^一Vなどは、おそらく、ハ昨日ノ非ハ恨悔ベカラズVと読むべきで（捨仮名による）、片桐一男氏のように、恨悔などと音読みするのはいかがであらう。第二の中のハ慮念V第三の中のハ過度Vなどもオモウ・スゴスと読んでよからう。⁽⁵⁾

全体的に一読して、現代でも読むにたえる内容と意義をもっている。文章もわかりやすく、左ルビというこの種のものに共通する表記上の方法と合わせて、その啓蒙的な万人向けの文体となっている。

『病家三不治』のこと もう一つの『病家三不治』について述べる。これについては『磐水存響乾』に次のような説明がある。

醒世論言

二冊 上巻 刊本
下巻 写本

文化元年の作なれど上巻の病家三不治は杉田先生の七不可に添へ享和紀元に上本す其後清人徐氏邢氏の医戒を読みて訓解を施し文化に至り上下通して此の題名を下したるなり（同書八ページ）

そして『磐水存響坤』に所収の『醒世論言』には次の文がある。

醒世論言引

享和改元之秋。小詩^{（二）}仙堂古稀翁。自撰七不可養生編。成矣。晚生茂質。附録之。以病家三不治。遂為一書。刻其塾。是歲文化元年之夏。茂質偶爾。訳徐氏病家論。及邢氏医家警戒教言。録為一編。頗多与余所學相類者。因歎。病家其流弊。和夏同轍也。今以旧刻。為上差。以後所録。為下卷。私題曰醒世論言。蓋論彼世之沈醉名利。眩惑妖妄。而不曉修真之理者。使之醒覺之微意也云。

文化甲子七月申元

磐水陳人書

磐水漫草載此文、脱題字覚字、是正、修識

『醒世論言』をあちこちに求めたが得られなかった。刊本と写本とを合綴して一巻の書とするのも不思議なスタイルであり、現存すれば原本をぜひみたいものである。それはともかく、『病家三不治』（以下『三不治』と略称する）についていえば、まきがきの部分からもわかるように、成立は八其年の初冬徒弟大槻茂質謹で記すVのとおりである。玄沢が四十五歳の時、医師としても、あぶらののりきった時といえそうである。もっとも、八既に病家三不治と云小冊を草し置たり（中略）是を同志に伝へむ事を冀ふ師翁速に許し給ふに従ひ頓て其旧稿より大略を抄出して其後に附すVとあって、早く原病家三不治的なものが述作されていたようである。内容的に八我常々見聞しこともを書つゝれるまでなりV（二丁オ）とあるから、玄白の場合のような東西医学思想の影響はなかったかもしれない。おそらく、耕牛からの耳学問や、『瘍医新書』、『重訂解体新書』などの翻訳の過程で、断片的に得たもので、

「養生七不可」・「病家三不治」

この方面の医学思想的な原書は読んでいなかったのではないかと思う（彼の蘭学学習の経歴からは重要なことであろうが、後日の課題とする）。しかし内容は格調高い。第一の「人賤者病不_レ尽_レ治_レ」は一読して単純ではない。「人賤しきものは多くは愚なる故……」の一条は、現代の日本の社会にもあてはまる。まして江戸時代において、玄沢が手がけた病家の実情、実態を伝えて切なるものがある。⁽⁷⁾「人其自然の力にておのづから癒る事もあり是賤しき身に備りし天幸ともいふべき也」の自然は、玄白のそれとやや異なることも見逃してはならない。はるかに形而下的な、生身のものである。したがって次のことは重い響きをもって、今日のわたくしどもにも迫ってくる。

（前略）籤を伺ひ卜に問ひ巫を信して薬をおろそかにし治療の度を失ひ軽きは重きに至り重きは生命を失ふに到るかくのことき貧家の病者は卑賤愚陋なればとて分別有人の教諭に従ひ能此等の所を弁へて命は大切な物と心得かならず誠ある医者

に託すべし

あえていうならば、日本的ヒューマニズムの、しかも非感傷的ともいうべき合理的精神が脈うっているといえる。もしこれが真に玄沢の経験からほとぼり出てきたとするならば、すばらしい生命尊重のことばであり、時代を超越して現代に語りかけているといわねばならない。貧者への洞察は、反面、富者への観察となる。「人すべて富有のものは勢はありながら慮浅く惑ひは却て深きもの多し」とさえ断言する。これは生療法が「人書を以て馬を御するの類」と警告し、さらに医師自からが、どうあるべきかを自覚する。「人幼より学ひ老に至りても熟せざるは医者業なり」（中略）医の業は生命に係る所なれば自ら求めてかならず其大事を誤ることなかるへし」という自戒のことばを高く評価すべきであろう。ここまでくるとフーヘランドの『医戒』のことばや精神と一致するところありといえる。紙数の関係で、『医戒』などとの比較ができぬが、『医戒』に示された「人夫人ノ生ヲ保全シ、務メテコレヲ長カラシムルハ、是医ノ最大目的ナリ」と同質的であろう。幼児の養育についても、「人薬作りて地に植付ぬやうなる養ひ」をきっぱりと否定し、逞しくも強烈な医師の実践道徳を説く。そして急病人を目前にしながらか古人の論説に正しく合ざれば大事大切に惑ひ意を決して調進せずとする愚医を批判し、その旧套打破さえ叫んで革新的であり、今日的だ。強い彼の意志の力まで感得

できるであろう。あるいはまた彼の出生と成長の過程を想像することができよう。であるから、 \wedge 将相豈異種あらんや生れて声を同じ長して俗を異にするまでなり \vee と絶叫することの正しさも肯定できる。人間平等の精神であり、日本近代思想を考える上からも重要な一ページである。福沢諭吉はここに存在する。まさしく玄沢の知られざる一面を実に有効に示してあまりある。最後のこ

とばも味わりべき自信と信念に満ちた医師のそれである。

万の事すべて皆其任する医を丁寧^{ていねい}に問尋ねその指揮^{さしづ}する所を守り私を加へざるを専らとすべし
まさに病家にとって、痛烈な忠告である。これまでみてくると、なにはともあれ、直接間接に西欧の医学思想も考えさせるとい
うことができそうである。

おわりに 紙数の超過で、玄沢のこうした思想の源流を彼の語ることはで紹介して擱筆としよう。それは『醒世論言』の下にみえるもので、『医学源流論』がそれである。これは \wedge 清 吳江徐靈胎洄溪大椿 \vee の著として玄沢が訳出しているものであって、たとえば \wedge (前略) 古人所謂以三性命。当人情。其誤三也 \vee の原文をこう訳している。

(前略) 大事の命を以てさしあたる人情義理合にからまるといふものにしてあるまじき事なり其誤り三つなり

懇意の医師でも、病状次第で別の医師にみせる必要を説く。義理人情のために遠慮してはいけないという主旨である。あるいはまた \wedge 清 山左刑朝耀尚卿輯 蘭瘦居士訳(大観玄沢のこと) \vee でも、次のようにある。

遇急病請到。即行。急病ありと迎ひを受けたらば
取る者も取あへず早くみまへ

——玄沢の『三不治』の源流はこのへんにあるとみられよう。他日この清の徐氏・邢氏について考述の機を得たい。これはまた、玄白のいう漢土の名医でもあつたらうか。⁽⁸⁾ヨーロッパも中国も、かかる医学思想、医師の倫理で大いに一致、共鳴するところがあるのを感じるのである。

最後に一言つけ加えると、『養生七不可』・『病家三不治』の翻刻とその解題は、岡田袈裟男君(大学院(文)学生
早大図書館勤務)の手によるもの。

「養生七不可」・「病家三不治」

また同君がそれぞれ、『日本衛生文庫 第一輯』及び『磐水存響坤』所収の翻刻によって二本を比較検討してくれた。(47・3・9)

(1) 注

「早稲田大学図書館紀要 第十三号」で、緒方富雄氏が、ハヒポクラテスをオランダ語の本を通じて認識したのは、蘭学者大槻玄沢(一七五二—一八二七)が最初である。(中略)医学思想の部分はヘイステルの内科書(シュルゼインとよばれる外科書でなく)に由来しているVと述べられており、大槻玄沢もハ内科書第五章Vと指摘しているが、はたしてどういいう内科書なのだろうか。医学史などを調べると、ヘイステルのものは“Chirurgie”と“Compendium Anatomicum”(一七三三)の二名著が知られており、ともに外科書である。原書を手にできないので断定しかねるが、玄沢がハ内科書?Vを手にした点に関しては再考の余地がありはしまいか。博雅の士の御教示を得たい。

(2)

関場不二彦『西医学東漸史話上』(昭和八年刊)に所収、司馬江漢の筆。賛画中に、ハ莫鎖古陸速 F. P. Musculus。楊爸斯、未考、ヤン、パス。把胡盧 R. Bauer、拖股別陸極 Tunberg の四人の医師についても考証しておられる。また洋書を耕牛がもつていて、それが^{ヘイステル}Heestear ともあつてヘイステルの書であることも指摘されている。なお、早稲田大学図書館蔵の耕牛肖像および小伝も上であげた江漢のものと同様な構図であり、これに『七不可』が合装されていて(これも注目したい)、しかも大槻玄沢のことば、ハ此図に対すれば今又再会し髣髴として新に其教を受けるが如し……文政癸未初夏磐水老人茂質月洲の消遣精舎に録すVとある。玄沢も耕牛に教えを受けたことがわかる。これは別の『磐水随筆』によって、彼が長崎遊学をした際(天明五年)に耕牛に教えを受けていることが判明するから、それと一致するものである。先にあげた関場氏著書所収の肖像は天明戊申(八年)の作であるから、これとも一致する点がある。

(3)

注(1)でもふれたが、ヒポクラテスから玄沢までの関連は一つの流れとして、つぎのように推定できそうである。



(4)

C.W.フリーランド『医戒』(現代教養文庫、社会思想社)の解説で、杉本はハ自然良能Vについて略述しておいた。参照されたい。

- (5) 片桐一男『杉田玄白』（人物叢書、吉川弘文館）では、音読みしている。読み誤りであろう。
- (6) 玄沢の他の作品などを検討したところ、『磐水存響』所収のものは、原本と異なりが目立つ。これは、編者による改編と考えられるので、原本のない『醒世論言』なども、十分に注意してとりあつかうべきかと思う。
- (7) 大槻玄沢については、まだ未知なることが多い。とくに官途につく前と後とで、態度や言動も異なるようである。『三不治』の内容と執筆の時期は玄沢を考えるうえで重要かと思う。
- (8) 玄沢の訳書『重訂解体新書』の八附録Ⅴ特に、下に玄沢の医学思想を考える記述が豊かにみられる。その中に、清の八王恵源Ⅴの『医学原始』があげられている。彼の参考にした医書の一つであろう。

（杉本…本学文学部教授）